

Naomi Braun Rosenthal: *Spinster Tales and Womanly Possibilities*

New York: State University of New York Press, 2002. xi + 186p.

山口吉男

本書は19世紀末から20世紀半ばにかけての独身女性のイメージ研究である。spinsterと聞いて私はドイツ映画『制服の処女』に登場する、眼鏡をかけ、揉み手をするように両手を胸のところで合わせ、猫背で足早に歩く主任教師を連想したが、本書の著者によれば、それは後年のspinsterのステレオタイプであって、独身女性のイメージはそのように単純なものではないらしい。著者によると、19世紀末に女性の新しい生き方のモデルとして登場したspinsterは、第一次世界大戦前後には「女性の解放の精華」(88)として社会の中心に躍り出るが、戦間期には周辺に押しやられ、第二次大戦後には否定されるべきものとして再登場するが、50年代半ば以降マイノリティの運動の高まりとともに退場したという。著者は、忘却のなかのspinsterをよみがえらせ、その変貌の歴史をたどり直すことで、現在の女性をめぐる議論に一石を投げようとする。

その際、著者の関心は、現実の独身女性やその統計的な研究でもなければ、個々のspinster imageでもなく、19世紀末から約一世紀の間、ジェンダー、セクシュアリティ、家族が問題となるころには決まって登場した、フィクションとしての独身女性なのである。彼女は、現実の独身女性の出身階級、民族、人種は多岐にわたるが、中産階級出身の白人大学卒女性で、性的には「純潔」chasteと表象される。著者はフィクションとしてのspinsterを、人々や社会が人生や出来事を解釈したり理解したりするための「参照枠」や「解釈の図式」(6)を提供すると同時に時代の変化を映し出すものとしてcultural iconと呼び、このspinster iconographyの生成・発展・消滅を跡付けようとする。そしてこの

iconographyに与ったものとして、19世紀末創刊の女性誌 *Ladies Home Journal* (以下 *LHJ* と略記) や性科学・精神分析の大衆本、映画が検討される。

本書は、上述したような総論に続いて第2から第7章までは1890年、1913年、1933年の *LHJ* 掲載の短編小説の再録とその読解が交互に配され、第8章では第二次大戦中から戦後にかけての映画の中の spinster を、最終章では icon の消滅と女性の現状を論じるという構成になっているが、なかでも、女子の高等教育の普及を背景に、女性雑誌という新しいメディアが時代に鋭敏な編集者を得て、女性をめぐる議論のフォーラムとなる *LHJ* の、女子大生を主人公とする作品の分析を通して spinster icon とその変容を読み解く第3・5・7章が中心になる。それはまた *LHJ* 論でもある。

1890年の“Rebekah Spofford’s Theory”は、大学で学んだ科学的知識を駆使して実母と継父の破産した農場を再建した後、新たな情熱をもって仕事へと進み出る、大卒独身女性を描いているが、著者はこの作品について、「教訓的でレシピを読んでいるよう」(34)であるだけでなく、主人公の独身と職業の選択についても今日の読者にはわかりにくい点があるが、そこにこそ spinster icon が暗黙の前提になっており、大学教育、仕事、未婚はいわば三点セットで、ことさら描く必要がなかったという。Rebekah は、高等教育の普及と職業機会の拡大で女性が家庭から自立する「もうひとつの人生」alternative life possibilities and choices (33) が可能になる19世紀後半の「新しい女性」なのだ。「新しい女性」は中産階級出身で大卒の、純潔の白人女性に認められた特権だった。

しかし1913年の“The Woman Who Threw Herself Away”は、後妻として移民の肉屋と結婚した知人の母親ぶりに接して、職業を捨てて結婚を決意する大学の女性教師とその教え子を描いている。だが著者によれば、物語は家庭の幸福に入ることを説いているにもかかわらず、独身のキャリア女性のほうを魅力的に描く結果になっている。Rebekah にあった家族や社会との葛藤がないことから spinster が受け入れられているのがわかる。spinster が「女性の解放の精華」と呼ばれたこの時代は、男子の職場にも女性が進出するようになったが、それは高等教育を受けられる中産階級の女性に限られ、職業と家庭は相容れないも

のとされたから大卒のキャリア女性は独身が当然とされた。しかし女性の職場進出や結婚回避の動きが未婚女性を家族論争の中心に押し出すと、spinsterは女権拡張の賛成、反対両派の旗印とされ、論争の格好のテーマとなる。優生学の立場からは大卒女性が家庭に背を向けるのは「国家的悲劇」(83)であり、南・東欧からの移民の流入と高い出生率を前に白人中産階級の出生率の減少は「人種の自殺行為」(84)であるなどと非難され、他方、労働者階級の娯楽であるパレスクの笑いの定番となり、中産階級攻撃の標的とされる。女装した男性が演じるold maidは、労働者階級のセクシュアリティを抑圧する中産階級出身大卒女性の改革派に対する反撃ともなった。

既婚女性の職場進出が進む戦間期はspinster imageに変更を迫る。1933年の“The Whip Of Emotion”では、女子学生の関心は男性教授にあって、spinsterは忌避される凡庸な教師として間接的に言及されるに過ぎない。「女性の解放の精華」は周辺的存在に後退する。celibacyは「第一次世界大戦の戦死者に数えられる。」(115)性への無関心をrespectable womanの条件とする建前が崩れ、代って異性愛が「疎外と細分化の現代に於て自己分裂を修復し自己回復を図る主たる手段」(115)とみなされる、性科学や深層心理学の大衆化の時代には、結婚に代るもうひとつの生き方だったspinsterhoodは性的異常とみなされる。結婚しない女性は「人生の目的を奪われた賤民となった。」(124)

戦中から戦後にかけて、既婚女性の勤労働員と職場進出、結婚年齢の低下と結婚率の上昇、性革命による婚前交渉の広がりの中で、退場が迫っていたspinsterは「いわば死の床で蘇る」(126)が、その容貌は精彩を欠く。著書は、この時期のspinster imageの代表として二つの映画『情熱の航路』*Now, Voyager*と『旅情』*Summertime*の、ともに婚期を逸した女性が既婚男性との性体験によって救われる設定に、女性の全体性の回復は男性への無条件の服従によってである、というメッセージが読み取れるという。celibacyは特権ではなく不幸をもたらすものとみなされる。こうして19世紀末に男性の支配からの自立を目指して颯爽と登場したspinsterであるが、20世紀の半ばには特権の故に排除され、再び男性の支配に服すことが要求される。

本書のもうひとつの論点は、LHJが、とくに第二代編集長のEdward Bokの

もとで spinster icon の形成に果たした役割である。著者は LHJ が「全ての雑誌の中で家庭外での女性の役割を支持することがもっとも少ない」(78) とする先行研究に、雑誌の方針は一貫したものでないと反論して、編集の紆余曲折のなかに雑誌の積極的な役割を読み取っている。Bok は、女性の政治的権利についてはまったくの保守主義者だが、女性の高等教育とキャリアについては支持するだけでなく独身女性に手記を發表する場を提供するかと思えば、若い女性たちの結婚回避の風潮が家族の将来にとって憂慮すべきことだと考えると結婚と出産が女性の天職であると説く。しかし雑誌の論調は独身女性に好意的であったとか、雑誌は一般論としては結婚生活を賞賛するが寄稿者たちは結婚に懸念を抱いていたとか、高等教育を受けた女性が家庭にもたらす恩恵を数え上げながら彼女たちを待ち受けている家庭の問題も指摘せずにはおれない記事もあるとか、家庭を顧みない女性を戒めるはずが意図に反して独身の長所を述べる結果になっている、など雑誌の一貫性のなさを指摘して、読者の関心に応えるこの姿勢が spinster iconography の形成に与ったと述べる。

以上、見てきたように、本書の特徴は、spinster を cultural icon として取り出すことと、保守的な家庭雑誌とされる LHJ を再評価することにある。なかでも、spinster icon の生成と絶頂が雑誌という新しいメディアの登場・興隆と軌を一にして展開する 19 世紀末から第一次大戦にいたる議論は、spinster についての私たちの蒙を啓くだけでなく、女性と国家・民族・階級のダイナミックな関係を指摘して興味深いのが、私には特に、社会運動の理論を援用して、雑誌に掲載された独身女性の通俗的な「弁明」apologia—独身であることの一—を独身女性糾合の「檄文」mobilizing narrative (47) とする読みが刺激的であった。

1890 年代の雑誌論文を取録した *The American 1890s—A Cultural Reader* の編者は、雑誌の「黄金時代」である 90 年代は雑誌が社会秩序と大衆文化の形成に寄与し、雑誌は消費社会に不可欠となった、雑誌はそれに携わる人々の複雑な関係からなる社会的なテキストであるとも述べている。本書の著者が Bok と LHJ で行っているのは、雑誌のテキストに織り込まれた人間関係を読みほどこき、雑誌を通して spinster icon に作用する力を測定することである。それは 19 世紀末から今日にいたる消費社会の大衆文化状況ということであるが、著者は、対

立や矛盾に満ちた大衆文化状況下の選択の可能性について繰り返し述べており、LHJの読みはその実践だった。性の二元論に代えて同性愛を「第三のジェンダー」(122)と呼ぶ。Butlerの考えに、かつてのspinsterを「第三の性」(40)とみる考えを重ね合わせるのも、性とジェンダーの袋小路からの脱出の試みといえる。

私は本書を読みながら、*Backlash*で報告された80年代アメリカの独身・キャリアの女性に対する攻撃のことを思った。攻撃の手法も同じなら、女が問題というとき実は男が問題だという指摘も同じ。手法の反復は問題の設定が変わっていないことを示しており、男性の危機の解決に「女性の無条件降伏」(143)では、問題の解決にならない。

最後に、著者は終章で、女性と家族の現状について、働くシングルマザーの増大によって、女性と子どもが「家庭生活の不可欠の中心」(152)になったという。女性と家族をめぐる議論に新たに働くシングルマザーが登場するのだが、かつてのspinsterのように女性の期待を映すものではなく、また社会問題ではあっても社会的解決策とはみなされない、と著者は指摘している。少子化のわが国では「オニババ化する」と脅して女性に結婚や出産を煽るのが流行のようだが、女性のシングルマザー希望も多いというから、シングルマザーの自立と自活を可能にする仕組みをつくるのが先ではないか。シングルマザーを厄介視しては解決から遠ざかるばかりではないか。

参考文献

- Faludi, Susan. *Backlash: The Undeclared War against American Women*. N. Y., Anchor Books, 1991.
- Smith, Susan Harris, and Melanie Dawson, eds., *The American 1890s: — A Cultural Reader*. Durham and London. Duke University Press, 2000.